CURES Salon

『中国華北農村経済研究序説』（経済学部研究叢書4）を刊行して

内山雅生

このたび、拙著『中国華北農村経済研究序説』を、「金沢大学経済学部研究叢書4」として上梓させていただいた。筆者の研究課題からすれば、拙著は未だ中間報告に留まっているが、刊行されたことにより、筆者の問題意識はより鮮明になってきた。現在拙著の残した課題について、その克服のための作業の内容と方法を思索している。

ところで、華北農村経済と民衆運動との関連を考える中で、ニコラス・ワース著、荒田洋訳『ロシア農民生活誌　1917～1939年』（平凡社　1985年）を読んだ。本書は、1917年のロシア革命から、30年代の集団化に至る農民の日常生活を、アナール派的手法で描いた好著である。三部から成るその構成には、農民生活を取り巻く社会的経済的条件や、ソビエト権力の農村把握に直面していく農民の政治的対応が述べられている。しかしワースの真骨頂は、新しい事態の推移の中で「古いもの」と規定された伝統的祭りとか、口承文学のような農民にとって固有な文化が、社会変革の中でいかなる意味を持ったかという問題提起であろう。

むろんワースの研究と今日のペレストロイカは、直接には結びつかない。しかしゴルバチョフがレーニン段階まで検討対象に入れて社会主義を再検討しなければならない背景には、ロシア革命の裏側で何が起っていたのか、農村社会の末端で農民は社会変動をいかに受け止め行動したのかということまで熟慮しなければ、もはや社会主義建設を語れないという歴史的課題があるように思える。

従ってワースの研究の意義は、従来の社会主義革命研究の中で捨象されてきた農民の内面とか、その眼前で展開する人間関係をも含めた社会変動に対する心的対応について、鋭いメスをふるい、歴史の中の「オチコボレ」を拾い上げようとしたことにある。

話を華北農村経済と民衆運動との関連ということにもどせば、筆者は今日までの中国研究が、中国革命の中で農民の生活レベルでの変動を充分にあつかってきたのかという疑念を拭い去ることができない。

つまり、抗日戦や国共内戦を含めて、中国革命がきわめてドラステックな政治変動であったことに凝縮されてしまい、農民を取り巻く経済事情も、主として時の政治権力の経済政策から分析されていた。その結果、社会変動に組み込まれていった農民の伝統的文化や生活レベルでの思考が、それら変動といかに有機的な関係をとっていたか、またはとりえず新たな問題を引き起こしたか、農村社会の末端に視座をすえて充分に考察されることはなかった。

この10年間に見られる現代中国についての理解も、例えば「人民公社」の解体という事実に驚き、そこから派生する「社会主義」への一面的評価が先行している。そして50年代の集団化の意味が、政策の当否の中で語られるに留まり、果して農民の生活レベルの中からみすえ直してみようとする思考も、多数意見にはなりえていない。

そんな中国研究の現状に、拙著はいかなる波紋をなげかけ得るのだろうか。自問自答している毎日である。

（金沢大学経済学部助教授）